

ループリック版実習評価尺度の開発

広瀬 美和 ・ 大内 善広 ・ 小川 智子 ・ 清水 正美
林 和歌子 ・ 堀 千鶴子 ・ 佐野 智子

【要旨】

本報告は2014年度学長所管研究助成を受けて行った調査の報告である。評価が困難であり、また学習者自身も学習内容を明確に意識しにくかった、福祉専門職を目指す実習において、指導者・評価者と実習生・学習者、また養成校ともに理解しやすい評価指標を開発することを目的とした。実習フィールドの協力を得て、実習評価についての意識調査とループリックの原案作成を行った結果、実習現場でも評価に対する困り感を抱えていることや、ループリックに対する関心の存在が示された。また、実践現場で求められる専門職としてのパフォーマンスの要素が示された。

キーワード：ループリック、パフォーマンス評価、学習者、実習、正統的周辺参加

1. 問 題

福祉総合学部は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士及び幼稚園教諭1種免許という国家資格の取得を目指す学部である。そのため、ほぼ全員の学生が資格取得に向けて学外の施設において実習を経験し、そこで受けた実習評価に従った成績評価によって実習の単位を取得する。また、本学全体でも、キャンパス外の実社会での研修などを経験する「フィールド教育」、社会でスペシャリストになるためのスキルを身につけ卒業後の職業につなげていくための「資格取得教育」を推進しており、資格取得に向けた学外での実習の充実が必須である。

しかし同一教員が評価する学内の科目と異なり、実習先によって要求水準が異なるために評価が安定しないのが現状である。実習先によって評価が安定しないため、実習経験を積み重ねていっても実習生自身が評価によって発達的变化を実感することが難しい。また、実習施設においても、経験豊かな職員が指導にあたるとは限らず、たとえば離職率の高さが問題視されている保育業界では、経験年数3年未満の保育士が指導にあたる場合もあり、指導側も何を養成すべきかもわからず「困り感」をかかえたままに実習を終えてしまう場合もある。

一方、我が国の高等教育における質保証をめぐる様々な議論がなされている。わが国

の高等教育政策の焦点は近年「学生が何を学んだのか」へと移り、学習成果として評価することが教育にとって不可欠であり（松下，2012）、その評価方法が検討されている。2008年中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」においては、学士レベルの資質能力を備える人材養成をねらいとした改善方策の1つとして成績評価が位置付けられている。

インターンシップや実習的体験が、実践的指導力の向上に有意義であることを示した研究は、これまであまたの蓄積がある（たとえば成田・森田，2009；西田，2009）。しかしながら、具体的にどのようなパフォーマンスを通じて、「実践共同体」に「十全に参画」し、いかなる実践力を高めることになるのかは、明らかにされてこなかった。福祉専門職養成において、正統的周辺参加学習¹を効果的に進めるための具体的パフォーマンスを明らかにすることは、福祉援助の質の可視化にもつながり、教員や医療・福祉専門職養成の実践研究において、極めて有用であるといえよう。

このように、これまで評価者の主観に依存し信頼性が高いとはいえず難かった実習教育において、近年注目されるパフォーマンス評価は、評価者が適正な評価を行い指導内容と学習成果の明確化が図れるだけでなく、学習者自身が成長発達の確認を行い身につける能力の客観化と意識化を図ることに利用できるため、セルフモニタリングが促進されることも期待できる。パフォーマンス評価とは、伝統的な客観テストで評価される学力の様相に限界があることへの反省から、観察や対話、自由記述、実技を含めてパフォーマンス（たとえば表現活動や表現物）をもとに評価する方法である。学部教員と実習指導者が主体的に実習内容の整備に取り組むことで、養成すべき専門家像が明確になり、将来的には福祉専門家養成課程全体について再考し学部内での教育内容の整理・充実を図ることに活用しうるものと考えられる。また、成功の度合いを示す数レベルの尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表はルーブリックと呼ばれる。さらに、このようなルーブリック開発のノウハウは福祉分野での評価に留まらず、様々なフィールド教育成果の明確化・可視化に援用し得るものと期待できる。

一方でそのような有用な評価方法が存在しながら、実習指導の現場でどのように認知されているかは明らかにはなっていない。また、どのように専門家となっていくかについては、徐々に専門家集団への参加を深めながら熟達していった経験を実際に持つ現場の指導者の意見なしに、適正なパフォーマンス課題の設定は不可能だろう。まずは実習指導者の認知度や困難、新たな評価方法への期待度等を検討したうえで、認知度を上げる取り組みを行うとともに、協同してパフォーマンス課題の検討をすることが不可欠である。

2. 目 的

本研究は、福祉専門職養成における、実習指導者・実習生が実習において身につけるべき能力を客観的に意識化することのできるルーブリックを開発し、質の高い専門家教育の実施

と適正な評価に活用し、地域の福祉実践者との連携を強化することを目的とする。ルーブリックとは、上述のように定義されているが、その中でも実習日誌の書き方などの特定課題ルーブリックを基本としつつ、正統的周辺参加をイメージしながら徐々に専門家に近づいていくことをレベルとして設定したものを想定する。ただし、実習段階に限定したものの開発を目指すこととし、例えば「実習生の立場について利用者に説明できる」などの基本的な行動や「利用者の情報を主体的に収集し、利用者の立場に立った視点で考える姿勢を持つ」などがパフォーマンスとして考えられる。

本研究が目指すルーブリック開発による資格取得のための実習の充実は学部を目指す教育と直結したものであり、従来の教育では行いえなかった、実習に関連するパフォーマンスに関する「学部教育の可視化」として位置づけられる。本報告においては以下の図に示したように、本学部の実習教育におけるルーブリック開発に向けての予備的な調査として、実習現場での認知度や評価についての意識を探索する。その上で、1段階目として実習での学習成果が表現されている、実習記録を中心としたルーブリック作成を試行することを目的とする。

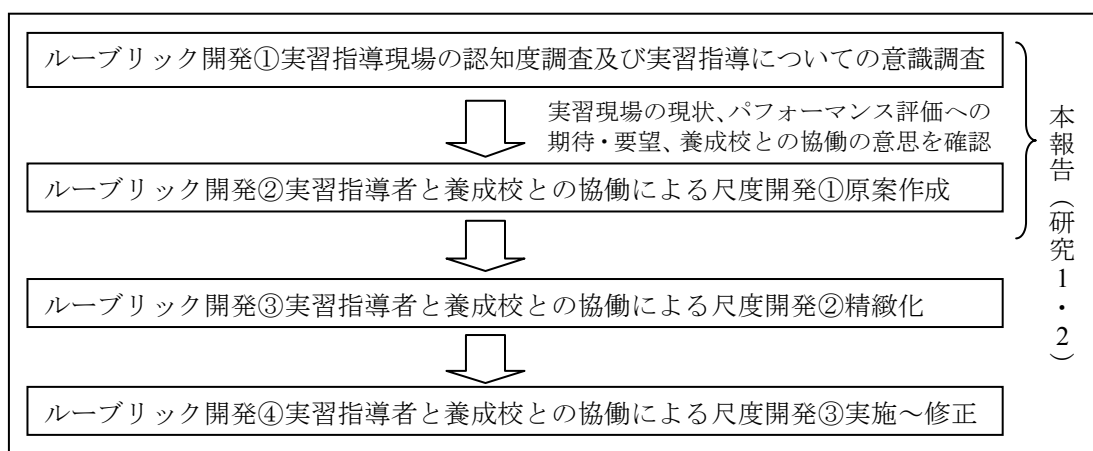


図0. ルーブリック版実習評価尺度開発の構造

3. 研究1 実習指導者の認知度及び意識調査

3.1 方法

福祉総合学部の4コースはそれぞれ実習フィールドを有しているため、各実習先に対する評価についての実態調査の実施が可能である。実習先の指導担当職員を対象として、どの程度パフォーマンス評価について認知しているか、実習評価にルーブリック方式がどの程度導入されているのか、どのように認識しているか、などについての調査を行い、実習評価の実態把握を行うこととした。

調査方法：質問紙法

調査手続き：パフォーマンス評価等について知っているか、関心があるか、また、現状の実習評価に困難を感じているか、改善についてどのように感じるか等について、おもに4件法で尋ねる質問項目を12項目作成した（付録1）。本学部の本年度の社会福祉士実習・精神保健福祉士実習・介護福祉士実習・保育士実習・教育実習協力先の指導担当者宛てに依頼状、返信用封筒を同封して調査用紙を郵送し2週間程度で返送いただくよう依頼した。郵送により返送されてきたものを対象とした。回収率は75.6%であった。各項目について回答の割合を算出するとともに、SPSSを用いた χ^2 検定によって回答者の属性による回答の割合や、項目間の関係について比較を行った。

3.2 結果

協力者の指導実習種別及び実習施設種別の内訳は表1、表2の通りであった。また、協力者の年代は表3に示した通りである。協力者の勤務経験と指導経験については表4、表5に示した通りであった。

表1. 実習種別

社会福祉士実習	36
精神保健福祉士実習	8
介護福祉士実習	13
保育実習・教育実習	57
未記入	4
計	118

表3. 年代

20代	6
30代	40
40代	28
50代	38
60代	4
未記入	2
計	118

表4. 勤務経験

3年未満	1
3～5年	3
5～8年	10
8～10年	4
10年以上	96
未記入	4
計	118

表2. 実習施設種別

障害者福祉施設	19
老人福祉施設	24
福祉施設	3
医療機関	5
居宅介護	0
保育所認定こども園	24
保育所以外	17
幼稚園	2
その他	5
未記入	19
計	99

表5. 指導年数

3年未満	11
3～5年	23
5～8年	17
8～10年	2
10年以上	57
未記入	8
計	118

実習先の指導担当職員において、パフォーマンス評価等に関してどの程度認知されているのかについて集計したところ、図1のような結果が得られた。

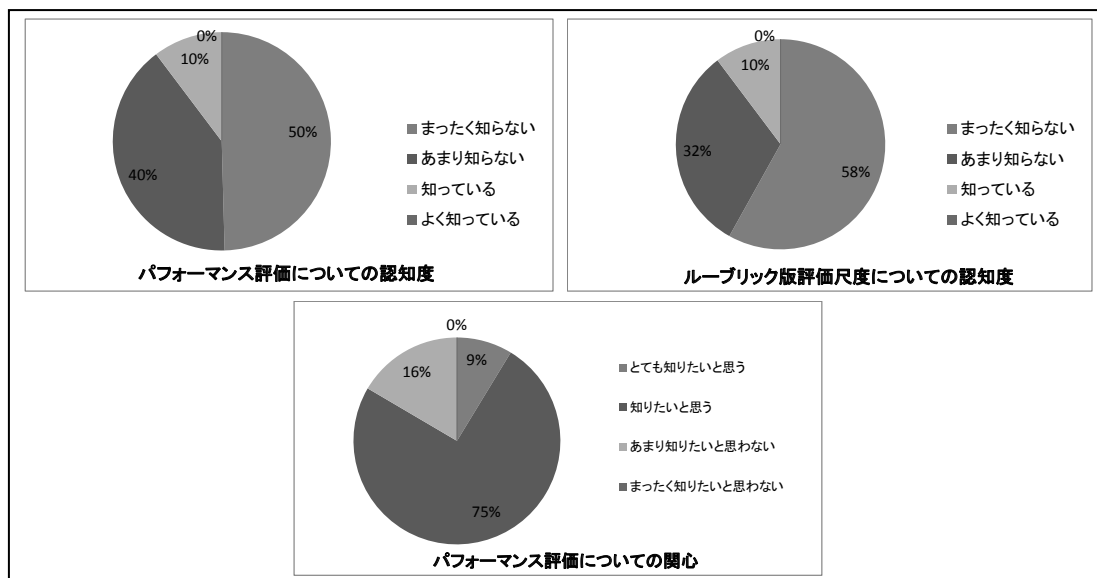


図1 パフォーマンス評価等に関する認知度

(1) パフォーマンス評価についての認知度

パフォーマンス評価について知っているかという問いに対しての回答では、9割の実習先にパフォーマンス評価が認知されていなかった。また、実習の種類や指導者の年代、経験年数による有意な差は見られなかった。

(2) ルーブリック版評価尺度についての認知度

ルーブリック版評価尺度についての認知度では、同様に9割の実習先に認知されていなかった。また、これについても実習種別等による有意な違いはみられなかった。

(3) 使用経験

使用経験については2例以外経験なしと回答していた。

(4) 使用の感想

上述したように(3)で使用経験があるという回答がほとんどなかったため、(4)の使用の感想についての回答はほとんどなかったが、経験ありの2例は2例とも使いやすかったと回答していた。

(5) ルーブリックについての関心

今後ルーブリックについて知りたいと思うかについての問いに対する回答については、8割を超えて知りたいと思うまたはとても知りたいと思うと回答しており、福祉専門職養成の実習先では、ある程度の関心の高さは伺える。実習種別による関心の高さに有意な差は見られなかったが精神保健福祉士実習と保育実習の指導者において、やや関心が低かった。

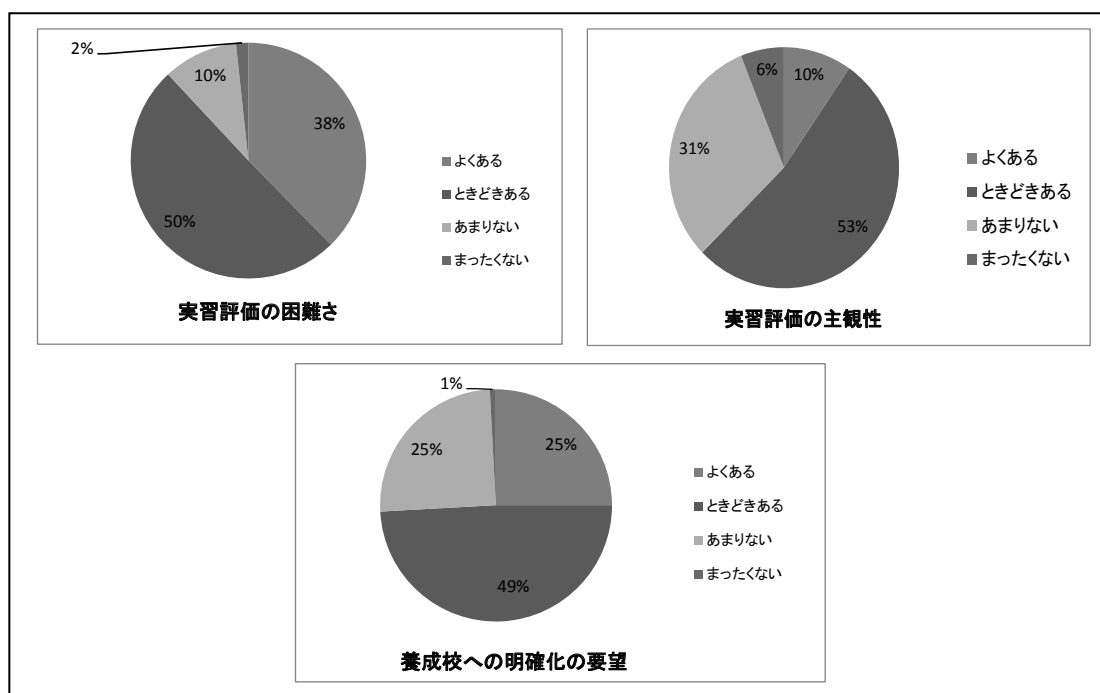


図2 実習における評価の現状

次に、実習先の指導担当職員において、実習における評価についての現状がどのように認識されているのかについて集計したところ、図2のような結果が得られた。

(6) 現状の困難さ

現状の実習評価について、困難さを感じるものが、「よくある」「ときどきある」を合わせると9割近くの指導者が現状の実習評価に困難を感じていると回答した。また、実習種別による困難さを感じる割合に有意な差は見られなかったが、介護福祉士や精神保健福祉士、社会福祉士の実習ではほとんどが困難さを感じているが、保育実習ではやや低かった。また、 χ^2 検定の結果、現状の実習評価に困難さを感じている指導者たちは、ルーブリックについて知りたいと関心を示していた ($\chi^2=13.898$ 、 $df=6$ 、 $p<.05$)。

(7) 実習評価の主観性について

実習評価において主観が入り込む余地があると考えている指導者が、6割いることがわかった。実習種別や年代、経験による大きな違いは見られなかったが、介護福祉士実習と保育士実習の指導者では主観的に行っていることについて心配している割合がやや低かった。また、 χ^2 検定の結果、実習評価において主観的に行っていると心配をしている指導者たちは、やはり実習評価について困難さを感じている ($\chi^2=35.931$ 、 $df=9$ 、 $p<.001$) ことがわかった。

(8) 明確化の要望

養成校に対し評価の明確化を求める割合は、「よくある」と「ときどきある」を合わせると、

7割以上が明確化を求めていることがわかった。実習種別や年代等で割合に大きな違いは見られなかった。

最後に、実習先の指導担当職員において、パフォーマンス評価によって解決しうる問題について、どのように認識されているのかを集計したところ、図3のような結果が得られた。

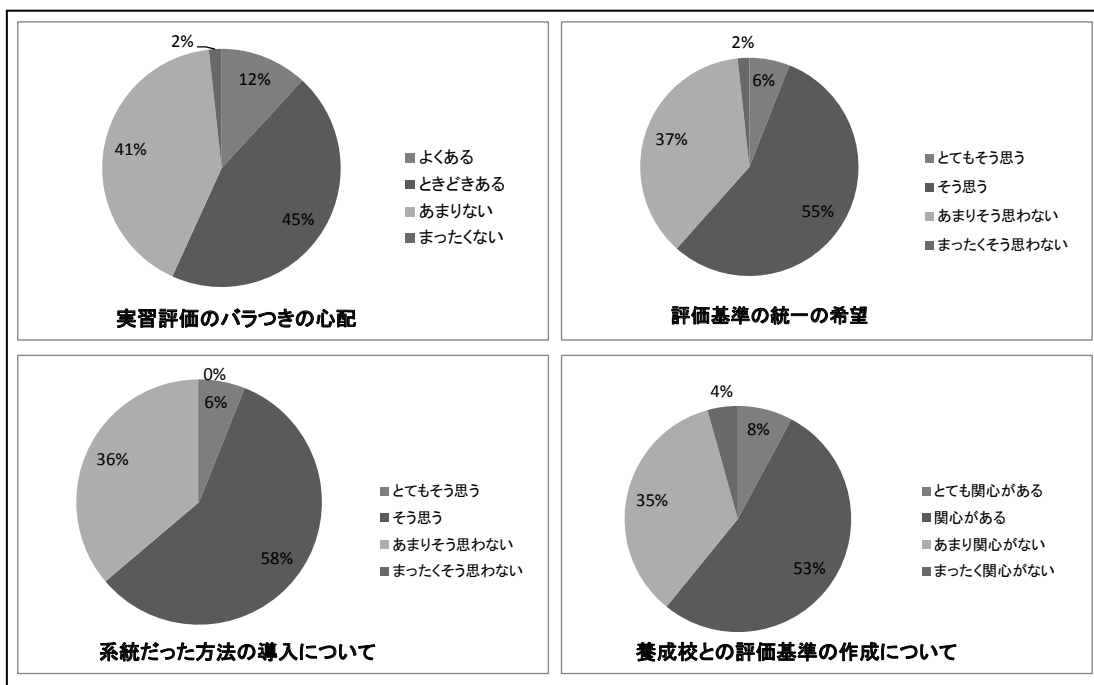


図3 パフォーマンス評価によって解決しうる問題への認識

(9) 統一性のなさについて

現状の実習評価に指導者や実習施設によるバラツキが心配されるかどうかについての問いには、「よくある」と「ときどきある」を合わせると半分以上がそのように感じていることがわかった。この割合について実習種別や年代等で大きな違いは見られなかった。

(10) 統一化の要望

半数以上が統一化を希望していたが、実習種別等で大きな違いは見られなかった。

(11) 系統だった新たな方法への関心

系統だった方法の導入については、半数以上が希望をしていた。実習種別等による大きな違いは見られなかった。

(12) 評価基準作成についての参加に対する関心

養成校と協同して実習評価基準を作成することについての関心を尋ねた質問では、半数以上が関心を有していることがわかった。実習種別による有意な違いは見られなかったが、保育実習と介護福祉士実習ではやや低かった。

3.3 考 察

全般的に、実習指導を担当している指導者の間で、パフォーマンス評価やルーブリックについての認知度は低かった。教育現場では近年注目を集めている評価方法ではあるが、実習指導においてはまだ導入し得るほど開発が進んでおらず、実践現場での認知度は低くなったと思われる。一方でこのような評価方法についての関心は低くなく、また、実習評価における困難を感じている指導者も多かった。さらに、困難を感じている指導者ほど関心も高く、明確で適正な評価ができ、指導がしやすくなることや、学習者自身が学習成果や課題を明確に意識しやすくなる評価法、指導法についての期待度は高く、実習評価に導入可能な開発を進めていく必要があるだろう。

全般的に実習種別や年代、また勤務経験年数や指導経験年数によって認知度や関心度について大きな違いは見られず、福祉専門職養成においては、どの種類の指導者も、評価の困難を感じていたり、新たな評価法に期待を持っていることがわかった。しかし、実際に自身が参加して評価基準を作成する作業については、介護実習や保育実習の指導者においてやや低く、離職率が高く人手不足の業種での余裕のなさが影響していると考えられ、今後尺度開発によって評価が行いやすくなる可能性があることや、将来の人材育成のために養成校と現場とが協同して改善を図っていく必要があることについて、より注力して伝えていく必要があるだろう。しかし、総じて実習評価や実習指導内容の精練に利用可能なルーブリックに対する要望は高いということが明らかとなった。

以上の結果を踏まえ、研究2では実習指導内容の精練に利用可能なルーブリックの原案について作成していく。

4. 研究2—ルーブリック原案作成

4.1 方 法

研究協力者：福祉施設の社会福祉実習指導者8名、実習生37名、及び養成校教員4名

手続き：縦軸には留意すべき項目として、「1. 字数・形式」、「2. 時系列の実習記録」「3. 振り返りと考察」を設定した。横軸には求められる項目として「指導の視点」、「押さえておくべき基本事項」、「実習生として身につける事項」、「専門職として身につける事項」を設定した。実習指導に関する研究会を開催し、教員と実習指導者との間で記録の指導に関する視点を共有した上で、養成校教員4名、社会福祉実習指導者8名が2グループに分かれ、事前に用意していた養成校側と実習指導側でそれぞれ作成した項目を持ちより協議した結果を1つのマトリックス図にまとめた。さらにそのマトリックスに関する自由記述形式のアンケートを、実習を終了した学生を対象に実施し、その回答を養成校教員がマトリックスに反映させた。

4.2 結果及び考察

作成した項目を表6に示す。

表6. 実習指導者及び学生の感想から作成した項目

項目	求められる視点	押さえておくべき基本事項	実習生として身につける事項
字数・形式	何のために記録を記入するのかその目的を考える	対外的な文章であることの認識をもつ	・日記のような日誌にならないようにする。 ・人に見せられる文章か確認を行う。 ・わかりやすい字で丁寧な字で記入する。
		事前に習得しておくこと	・あらかじめ書き方を教員に教えてもらう。 ・普段から文字数に慣れておく。 ・日記にならない記録の仕方を学習しておく。
	対外的な記録として適切な形式で記入する	ボールペンで記入する	・正式な書類は全てボールペンを使うことを理解する。 ・下書きの跡は確実に消す。
		実習記録は、人に読みやすい字で丁寧に記入する	・誤字・脱字がない。 ・漢字で書くべき言葉は調べて適切に記入する。 ・文字は丁寧に記入する。
		文章表現を適切にする	・「である」調で記入する。 ・話し言葉ではなく書き言葉で記入する。 ・改行のルールを守る。
本日の目標	社会福祉を学ぶ学生として自分の課題が持っているのか確認を行う。	修正箇所を適切に修正する	・実習先の原則に従って修正する（二重線と印、修正テープなど）。
		実習計画や進捗状況とのバランスを考えながら明日の目標を設定する。	・わからない事柄、本日取り組みなかった事柄を次の日の目標に設定するなどの検討が行える。 ・次の日の業務を確認し、今日できなかったことを次の目標にする。
一日の取り組み	実習の1日の流れを記載し、留意点が記載されているか。	・実習初期は抽象的な課題設定でも良いが、少しずつ具体的に設定していく。	・例えば、連携とは何かについてさらに学びたいのであれば、連携のどの部分を学びたいのか細かく記入する。
		・時系列に実習で取り組んだことが記載されている。	・メモを取り、指導注意を受けたこと、活動内容を細かく記入する。 ・「何を何時に行った」という内容だけではなく、気を付けたこと、注意された事、教えてもらったこと、学んだことなども書く。
		・裏面につなげられるように記入する。	・裏面につなげるための表面なので、実習活動内容及び指導・注意を受けたことなどしっかり書く。
考察	体験全てではなく、目標と関連させ印象に残った事柄を抽出し記入する	・助言がなくても気づいたことを記入する。	・助言された、指導されたことを書くことと考察が書きやすい。
	小さな変化を大切に、背景を考え記入する	社会福祉士に必要な視点を意識する	・利用者の視点、職員の視点も同時に意識する。 ・利用者を中心として考え、社会福祉士としてどのように取り組むべきかを意識する。
	観察記録に加え自身の実践を記入する	利用者をよく観察し毎日の変化や感じたことを記入する	・利用者との会話などを具体的に記入し、その要因について考える。 ・利用者の行動観察や会話から気づいたこと感じたことを記入する。
	自身の支援の意図を記入する	目標に対する取り組みや今後の支援の課題を記入する	・自分がどこに気づき、支援をどのように行い、利用者がどのような反応を返してくれたか、具体的に記入する。 ・家族関係などについても視点を向けて記入する。
	自己覚知の視点から記入する	その日の支援の意図を記入する	・自身が何に気づき、何を考えて支援を行ったかを記入する。 ・自身の支援後を振り返り、感じたことなどを記入する。 ・利用者とうまく関係が取れなかった時、なぜそれが難しい支援になったのかについて、その時の状況を踏まえながら書く。
		自己覚知を意識して記入する	・自身の支援を通して、自分とは何者だろうかという考えを率直に記入する。

「字数・形式」については、「指導の視点として「何のために記録を記入するのか目的を考える」、「対外的な記録として適切な形式で記載されているか」が挙げられた。「本日の目標」では、「指導の視点」として、「社会福祉を学ぶ学生として自分の課題が持っているのか確認を行う」、「実習計画や進捗状況とのバランスを考えながら設定する」が挙げられた。「一日の取り組みの記入欄」では「指導の視点」として、「実習の一日の流れを記録し、留意点を記録しているか」が挙げられた。

「考察」では「指導の視点」として、「体験したこと全てを記載するのではなく、その日の目標と関連させ印象に残った2つ程度を抽出し記録する」、「小さな変化を大切にし、疑問に感じた背景などを記録する」、「観察記録に加え自身の実践を記録する」、「自らの行動、その行動の意図を記録する」「行動後の対象者や環境の変化を記録する」の5点が挙げられた。

また、それぞれの指導の視点において、「押さえておくべき基本事項」、「実習生として身につける事項」が挙げられた。しかし、「専門職として身につける事項」については挙げる事が出来なかった。

次に、実習生のアンケート結果からは、「記録に関する実習指導を通して、人に見せられる文章になっているのか」、「実習を通じて目標達成のためにどのように取り組んだのかなどを意識して書いていること」が確認できた。また、今回作成したマトリックスの活用のあり方については、「実習前に提示されていれば書き方の具体的な指標となったのではないのか」など肯定的な捉え方があったが、一方で、「マトリックスに頼り過ぎて自身の書く力や視点が伸びないのではないか」などの疑問も示された。

教員と指導者とでマトリックスを作成したことを通して、教員と指導者それぞれの指導の取り組みを共有することができ、指導で感じている難しさを言語化することで、指導の視点について理解を深めることができた。一方で「専門職として身につける事項」に関しては、実習期間中では十分に達成することが難しいことが指摘されたが、今後さらなる検討が必要である。

マトリックスを活用した指導に関しては、活用のメリット、デメリットの両面が指摘され、パフォーマンスをどの程度細かく設定するか、またルーブリックの今後の活用への課題が残った。

5. まとめ

本研究の結果、まず研究1で行った実習現場向けの調査により、実習現場でのパフォーマンス評価やルーブリックへの認知度は低いことが示された。また、実習指導や評価での困難さも見出された。このような状況から一定程度明確な評価方法への期待もある実態が明らかとなった。次に研究2において、実習指導者と養成校教員との共同により評価尺度の原案となる枠組みが開発された。同時に、この作業により指導の視点や学習内容の視覚化、明確化が図りうることも示された。

今後、これらの枠組みを本研究の目指すルーブリックの原案とし、精神保健福祉士実習・介護福祉士実習・保育・教育実習における学習について援用し、それぞれに詳細なパフォーマンス（実習生が身につけるべき事項）を追加していき、学習の段階を明確化していくことで評価尺度の精緻化を図っていった後、作成したルーブリックをもとに、指導者に評価の試行をしていただいたり、実習生にも試行させたり、さらに精緻化を図りながら開発を進めることによって、実習指導での利用に耐えうるルーブリックの実用化を行うことができると考えられる。ただし、上述したようにルーブリックを作成したり利用する際に学習内容などが固定化する危険性も示されたため、開発し実用化する際にはそのことに留意していく必要がある。

【注】

¹ 正統的周辺参加理論（Lave and Wenger, 1991）とは J・レイヴと E・ウェンガーが 90 年代に提唱した学習というものを「実践の共同体への周縁的参加から十全的参加（full Participation）へ向けての、成員としてのアイデンティティの形成過程」としてとらえる学習理論である。福祉専門職としての学習理論では、実習生としての基本的な態度を身につけることや、観察的な参加から、専門職集団の一員として利用者や子どもたちとかかわったり集団の中で連携をとりながら行動するように、参加度を深めていくことが想定されよう。

【参考文献】

- ダイアン ハート (2012) 『パフォーマンス評価入門―「真正の評価」論からの提案. (田中 耕治 (訳))』ミネルヴァ書房
- Lave, J. and Wenger, E.: *Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press (1991)
- 松下佳代 (2012) 「パフォーマンス評価による学習の質の評価―学習評価の構図の分析にもとづいて―」『京都大学高等教育研究』18 : 76-114
- 中村恵 (2012) 「ナビゲーション型 Web ポートフォリオシステムにおける保育者指標に関する研究」『日本教育工学会研究報告集 2012』3 : 177-182
- 成田信子・森田健 (2009) 「教育保育インターンシップⅡの現状と課題―保育所・幼稚園の場合」『関西国際大学研究紀要』10 : 27-39
- 西田 奈美子 (2009) 「保育所実習にむけた保育施設における社会体験学習の有効性について」『文化女子大学室蘭短期大学研究紀要』32 : 2-25
- 田中耕治 (2011) 「パフォーマンス評価とは何か」『パフォーマンス評価―思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』: 9-17 ぎょうせい

付 録

ご多用中ご協力ありがとうございます。結果は統計的に処理されますので個人が特定されることはありません。率直にお答えいただければ幸いです。

ご回答いただく方の属性について、以下のあてはまるものに○をつけてください。

- ご担当実習種類（実習施設種別）
 - ✓ 社会福祉士実習（障害者福祉施設 老人福祉施設 その他）
 - ✓ 精神保健福祉士実習（福祉施設 医療機関 その他）
 - ✓ 介護福祉士実習（障害者福祉施設 老人福祉施設 居宅介護 その他）
 - ✓ 保育実習（保育所または認定こども園 保育所以外の児童福祉施設 その他）
- 年代（20代 30代 40代 50代 60代） 性別（男 女 その他）
- 勤務経験年数（3年未満 3～5年 5～8年 8～10年 10年以上）
- 実習指導経験年数（3年未満 3～5年 5～8年 8～10年 10年以上）

■以下の問いのあてはまるものに○をつけてください。

(1) パフォーマンス評価について知っていますか

- ①全く知らない ②あまり知らない ③知っている ④よく知っている

(2) ルーブリック版評価尺度について知っていますか

- ①全く知らない ②あまり知らない ③知っている ④よく知っている

(3) ルーブリック形式の実習評価を行ったことがありますか

- ①ある ②ない

(4) 上の問い(3)であるとお答えの方は、お使いになった感想をお聞かせください

- ①使いやすかった ②使いにくかった ③その他（ ）

(5) パフォーマンス評価やルーブリックについて知りたいと思いますか

- ①とても知りたいと思う ②知りたいと思う ③あまり知りたいと思わない ④まったく知りたいと思わない

(6) 実習の評価に難しさを感じることはありますか

- ①よくある ②ときどきある ③あまりない ④まったくない

(7) 実習の評価を主観的に行っていると感じることはありますか

- ①よくある ②ときどきある ③あまりない ④まったくない

(8) 養成校に対して実習の評価基準をもっと明確にしてほしいと感じることはありますか

- ①よくある ②ときどきある ③あまりない ④まったくない

(9) 実習施設間で実習評価にバラつきが大きいと心配になることがありますか

- ①よくある ②ときどきある ③あまりない ④まったくない

(10) 実習施設間で実習評価の基準は統一されるべきだと思いますか

- ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④まったくそう思わない

(11) 実習評価に系統だった方法を使用してみたいと思いますか

- ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④まったくそう思わない

(12) 実習評価基準を実習施設と養成校とが協議して作成することに関心はありますか

- ①とても関心がある ②関心がある ③あまり関心がない ④関心がない

ご協力ありがとうございました。

ルーブリックとは、学習者のパフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴(実習生の行動など)を説明する記述語で構成される、評価基準の記述様式として定義される評価ツールのことを指します。